

内村鑑三の世界観と Shakespeare の人間観

(中の七)

前田利雄

Othello の正義

(一) Othello 劇の裁判性

——正義と愛の葛藤——

Othello 劇は批評家によって「性的嫉妬」(sexual jealousy)の劇、「最も愚かな愛と涯しく無限の信頼から嫉妬の拷問と憎悪の狂気への思いもかけずにうつり変る」ことに第一の興味をそそられる劇とあって、love-storyの劇とみなしてきた。しかし、これは愛の情熱の力ではなくて Mrs. Jameson のいう「生命にかかわる傷をうけつつも、自己を征服しつつある人生の情熱の力をみせるくれる劇」[†]である。

もし Desdemona が実際に罪ある女であったならば、Othello の愛が嫉妬で苦しめられつづき、劇は嫉妬で貫ぬかれたであろう。従ってこのような場合なら、この劇は嫉妬の劇といわれてもよいであろう。しかし事實は、Desdemona の愛は至純であり、彼の愛もまた単純にして義であったので、この二人の愛の崩壊は、二人の愛の裏切りでなく、自分の内面に宿る悪の力に抗し切れない Othello の善良なる性質の弱さからきたものである。そしてこの Othello の中に宿る悪とは、人なら誰でも有する普遍的欠陥——愛の理性化^{††}と自己欺瞞である。

† *Othello is no love-story. ...It is no exhibition of the power of the passion of love, but of the passion of life, vitally wounded and self-overmastering. If Desdemona had been really guilty, the greatness would have been destroyed, because his love would have been unworthy, false. But she is good, and his love is most perfect, just and good. That a man should place his perfect love on a wretched thing is miserably debasing, and shocking to thought; but that loving perfectly and well, he should by hellish human circumvention be brought to distrust and dread, and abjure his own perfect love, is most mournful indeed, — it is the infirmity of our good nature wrestling in vain with the strong powers evil. (Mrs. Jameson; Characteresties of Women, London, 1833, ii. 31. in *New Variorum Edition, Othello*, p. 414.)*

Mrs. Jameson の essay は Othello の悲劇を外部的にみている欠陥はあるとしても、きわめて洞察にとんだ名論文である。19世紀の前半でかかるすぐれた先駆的論文のあることを看過できない。

†† Coleridge は Othello を嫉妬心の深い性質とは全く反対の性格と考え、もし嫉妬があるというならば Othello のように Iago を信頼している人なら誰でも感じるであろうし、感ぜざるを得ない嫉妬、すなわち Iago によっても強制された嫉妬であるといっている。

Othello's belief not jealousy; forced upon him by Iago, and such as any man would and must feel who had believed of Iago as Othello.

[Coleridge; *Shakespearean Criticism*, (London, 1976) Vol. 1, p. 112]

Bradley も Coleridge と同じ考えをとり、Iago の陰謀によって Othello の嫉妬深くない性質が欺むかれて、無思慮に行動した悲劇——陰謀の悲劇にしている。

The character of Othello is comparatively simple, but, as I have dwelt on the prominence of intrigue and accident in the play, it is desirable to show how essentially the success of Iago's plot is connected with this character. ... *His tragedy lies in this—that his whole nature was indisposed to jealousy, and yet was such that he was unusually open to deception, and, if once wrought to passion, likely to act with little reflection, with no delay, and in the most decisive manner conceivable. (Shakespearean Tragedy, p. 186.)*

理性と愛の葛藤が Othello 劇の縦糸・横糸である。W. Norwottny が「Shakespeare はこの劇で正義が愛に対する関係において正義を評価しようと意図している」(“Shakespeare intends in this play an evaluation of justice in its relation to love”)¹ というのはこのゆえである。愛が相手に不実を感じるとき、嫉妬をおこす。嫉妬は愛の裏切りを論理的に起ったかの如くに「証明」しようとすることから「愛を理性によって論じ、愛に不利な証拠をうけ入れるという落とし穴」(“the pitfall of reasoning love and of admitting testimony against it”)² におちいる。ここから嫉妬は愛を正義と理性の法廷にひきづり出して非理性的な愛を理性と正義の訴訟に従わせる哲学的誤りを犯す。Shakespeare は愛に対する理性と正義の裁きをこの劇で強調して、裁判に類似する場面を連続して打ち出すことによってこの劇を進展させている。従ってこの劇は正義と裁判の用語がくり返しあらわれて、この劇の最重要のテーマを運んでいる。Othello 劇の裁判性をそれでは論じてみたい。

批評家は Desdemona を殺す第五幕の Othello に限って、「正義の御使」(“minister of justice”^{みつかい}) をみようとすけれども、この見方は部分的でありすぎている。Othello は劇の最初から自らを裁判官とみなしている。この劇全体が裁判劇であり、最初より Othello のみならず、登場人物は殆んどすべて自己の正義を主張し、相手の非を裁きの法廷にもちこもうとしている。Norwottny のいうように「第五幕の正義の主張は劇全体がそこに到達するべく計画されている最高潮である」(the insistence on justice in Act 5 of *Othello* is the culmination to which the drama as a whole is designed to lead.)³

劇は Roderigo は Iago を裁くことから開幕する。“Tush! Never tell me; I take it much unkindly / That thou, Iago, who hast my purse / As if the strings were thine, shouldst know of this” (1. 1. 1-3). そして弁解する Iago も明白に裁判用語をもって始める。Iago の弁解は三人の町のおえら方が「個人的訴訟」(“personal suit”) をもって Iago を副官に昇進させて欲しいと Othello に帽子を脱いだけれども Othello 裁判官は「訴えを却下した」(“nonsuited”) ということである。

Three great ones of the city
In *personal suit* to make me his lieutenant
Off-capp'd to him. ...
...
But he, as loving his pride and purposes,
...
Nonsuits my mediators; (1. 1. 8-16)

次に Iago は自分をしりぞけて副官になった Cassio を裁いてその資格のないことを「証明」する。また Cassio がその目で彼 (Iago) の実戦の腕の抜群さの「証拠」をみていることを理由にあげて、裁判に不可欠な、目にみえる「証拠」を初めて出している。これは後に Othello の “give me the ocular proof” (3. 3. 361) を思い出させる重要なテーマの image である。

But he, sir, had the election;
And I—of whom his eyes had seen *the proof*

At Rhodes, at Cyprus, and on other grounds
Christian and heathen—must be be-lee'd and calm'd
(1. 1. 27-30)

いつのまにか Iago は今まで原告側にたって、彼を被告として扱っていた Roderigo を公平な裁判官にかえて自己を検事として彼に自己のうけた不正を裁くように訴える。

Now, sir, be *judge* yourself,
Wher' I in any *just* term am affin'd
To love the Moor. (38-40)

また感情に激して天を裁判官として訴えて、利己主義をとることが正義であると主張する。

Heaven is my *judge*, not I for love and duty,
But seeming so, for my peculiar end: (59-60)

あとになって再び Iago は Roderigo に責められたとき、*You charge me most unjustly.* という。この Iago の検事の萌芽は第三幕では Othello に「証拠」あげに全力をあげて「罪」を確立する鬼検事に成長する。

娘の駆けおちをしった Brabantio は、Othello を盗人として告発し、裁判を要求する。

To *prison*; till fit time
Of law and course of *direet session*
Call thee to answer. (1. 2. 85-87)

Brabantio は Venice 政府の要人達を裁判官とする裁判で Othello を「妖術」(‘*witchcraft*’) の罪で訴える。Duke はその訴訟をとりあげて、「法律の血なまぐさい本」(‘*bloody book of law*’) (1. 3. 67) によってその罪人を裁くと宣言する。

Whoe'er he be that in this foul proceeding
Hath thus beguil'd your daughter of herself
And you of her, *the bloody book of law*
You shall yourself read in the bitter letter
After your own sense; yea, though our proper son
Stood in your *action*.†

この ‘*bloody book of law*’ は後に Othello が自ら裁き人となってこの正義の律法をふりかざして Desdemona に「血なまぐさい仕事」(‘*bloody business*’) を行なうことになることを思うとき、正義の律法は血を流すというこの劇の最重要のテーマの一を象徴している重要な言

† *action* は法律用語であることはいうまでもないが、Webster 辞典の説明をのせておく。
action: a proceeding in a court of justice by which one demands or enforces one's right or the redress or punishment of a wrong.

葉であることがわかる。しかしここでは Othello は被告となって無罪を主張する。Brabantio は「血に影響を与える強力な混合液」(‘some mixture powerful over the blood’) (1. 3. 104) を使用したと Othello を難ずる。しかし Duke はいう。「これを断言しても証明にならぬ」と。(To vouch this is no *proof* / Without more certain and more overt test / Than these thin habits and poor likenesses / Of modern seeming do *prefer*† against him. (106-109)。(prefer は裁判用語であることに注意すべきである。)

そしてこの Duke の ‘proof’ は Othello が自ら Duke のまねをして裁判官となる第三幕において Othello 自身によって濫用されて裁きの不可欠条件となってゆくことを我々は思い出す必要がある。今の Othello は被告として弁明の必要に迫られて、自己の無罪を証明する証人 Desdemona の召喚を裁判に要求する。

I do beseech you,
Send for the lady to the Sagittary,
And let her speak of me before her father:
If you do find me foul in her report,
The trust, the office I do hold of you,
Not only take away, but let your sentence.
Even fall upon my life. (1. 3. 114-120)

「彼女の陳述」(‘her report’)に「不義」(‘foul’)あれば死刑の「判決」(‘sentence’)を「下せ」(‘let...fall upon my life’)と被告 Othello は証人を求める。更に被告は証人のくるまでに「天に誓う如く真実に」(‘as truly as to heaven’)「自己の血の罪」(‘the vices of my blood’)を「正義において」(‘justly’)「告白」(‘confess’)すると語る。

And till she come, as truly as to heaven
I do confess the vices of my blood,
So justly to your grave ears I’ll present
How I did thrive in this fair lady’s love,
And she mine. (121-126)

証人 Desdemona の証言によって Othello の無罪が証明され、Othello の恋愛は「心と心のふれ合いによる懇望や公平なる話し合によってかちとられたものである」(‘came it by request and such fair question as soul to soul affords’) (113-14) ことがわかって Brabantio の訴訟は敗北した。元老院の人々の理性と思慮は Iago の計略と Brabantio の非理性的狂気の訴えに挫折を与えて Othello の正義に勝利を収めさせた。

Othello は理性と正義の都 Venice をはなれて無信仰と非理性を象徴する教徒トルコと荒れた海によって囲まれている孤島 Cyprus に支配権をまかされて赴任する。「尊敬すべき総督」(‘worthy governor’) (2. 1. 30) は赴任の夜、事件によっておこされて、裁判をおこなう。彼はかつて自己を裁いた Duke のまねをして ‘What is the matter?’ (2. 3. 165, 178, 195) を

† prefer: to put before a magistrate, administrator, court, etc. for consideration, sanction, or redress: as, he *preferred* charges against his assaulter. (Webster’s Dic.)

くり返し事件の解決に着手するが、Duke の冷静にして公平なる理性は彼に存在せず、最初より興奮していきりたち、命令も叱責も理性を欠く。最初 Othello が Montano に事件の説明を求めるとき、やや冷静であるが、その証明が得れないとわかるや、彼の正義の「血」が理性を支配し始め、彼の「最善の判断力」(‘*my best judgement*’) を彼の皮ふの色の黒さにくもらせる。†

Now, by heaven,
My blood begins my safer guides to rule,
And passion, having *my best judgement* collied,
Assays to lead the way. (2. 3. 206-9)

彼の性来の肉と血の逆上の情熱を正当化するために、彼の Cyprus 島の時局の緊張性 (215-216) や「キリスト者の恥」(‘*Christian shame*’) (174) を理由にあげて島の秩序破壊の罪の深刻性を説き、証言の早くされることを求めて部下に迫る。Iago の証言を得るや、彼一人の証言にもとづいて、被告 Cassio の陳述をきくことを怠る。彼の正義の裁判を Iago の「正直さ」に帰して、自己欺瞞におちいる。

I know, Iago,
Thy *honesty* and *love* doth mince this matter,
Making it light to Cassio, Cassio, I love thee:
But never more be officer of mine. (248-251)

この Cassio 罷免の裁きは、その後の Desdemona 裁判の先走りであり、後者における裁判官は前者におけるそれよりも一層激情的であり Othello の「血の悪」をあらわす。

副官の地位を失なった Cassio に Iago は「気前のよい」Desdemona を動かして「正直な訴訟」(‘*honest suit*’) (3. 2. 350) を彼女にするようにすすめる。しかしこれはすべて Iago の悪巧みであり、弁護士 Desdemona が被告 Cassio の訴えをとりあげて Othello 裁判官に「弁護する」(‘*plead*’) (2. 3. 364)†† ほど、又彼の副官免職の「法的取消しをする」(‘*repeal*’) (2. 3. 366) ようにとりなしをするほど、裁判官は彼女の弁護を彼女の浮気のためであると悪く解して弁護士 Desdemona の徳性を黒色にかえてしまうであろうと Iago は予告する。

for while this honest fool
Plies Desdemona to repair his fortunes,
And she for him *pleads* strongly to the Moor,

† Bradley はこの言葉を ‘*ominous words*’ といっているが、彼の「克己心」(self-control) を強調する余り、この事実まじめにとりあげてをさけた。しかも役者がこの場面の Othello を「荒々しく怒った」(‘*violently angry*’) Othello として演ずることは「全くの誤り」(‘*an utter mistake*’) であるとさえいっている。

For the actor, then, represent him as violently angry when he cashier Cassio is an utter mistake. (190 頁)

しかし Stoll はこの場面の Othello には ‘*judicial spirit*’ が欠けているといっている Othello の inner flaw に目をむけているのは公平な批評である。(Shakespeare and Other Masters, p. 201.)

†† Iago. For’tis most easy / The inclining Desdemona to subdue / In *any honest suit*. (2. 4. 349-350)

I'll pour this pestilence into his ear
That she *repeals* him for her body's lust ;
And, by how much she strives to do him good,
She shall undo her credit with the Moor.

Iago の予言の通り、Desdemona の「気前のよい、しんせな、人助けをしたがる、祝福された性質。('so free, so kind, so apt, so blessed a disposition') (328-9) は Cassio の「訴訟」をとりあげてまじめに果たそうとする。しかし彼女はその訴訟が Cassio のみのためではなく、夫 Othello のためでもあることをしって行動をとる。

I'll intermingle everything he does
With *Cassio's suit*. Therefore be merry, Cassio ;
For thy *solicitor*† shall rather die
Than give thy *cause*†† away. (3. 3. 25-28)
(Italics はすべて法律用語である)

「弁護士」Desdemona の役目は長つづきしない、彼女の「弁護」('advocation') は「乱れ」('not now in tune'), Cassio と同じように被告の運命におちいる。

Des. Alas! thrice-gentle Cassio!
My *advocation* is not now in tune ;
As I have *spoken for you* all my best
And stood within the blank of his displeasure
For my free speech. (3. 4. 121-128)

Othello は Desdemona の愛を彼の正義の法廷において取調べをする。裁判官 Othello は愛の裏切りの「証拠」を第一に求めようとする。愛という目にみえない性質を目にみえる物質に還元しようとするのである。しかも Othello は Iago 検事から「証拠」について何の言及もされていないのに、猜疑心を彼によってもやされるや、本能的に愛の「証拠」を求めて口にする。Shakespeare は Othello の自発的罪の潜在性を強調しているようだ。

Oth. For she had eyes, and chose me. No, Iago ;
I'll see before I doubt ; when I doubt, *prove* ;
And on the *proof*, there is no more but this ;
Away at once with love or jealousy! (189-192)

Iago. ...
I speak not yet of *proof*.
Look to your wife ; observe her well with Cassio ;
Wear your eyes thus, not jealous nor secure.
(196-198)

† solicitor 1. a person who solicits. 2. in England, any lawyer other than a *barrister* :
solicitors are not members of the bar and may not plead cases in superior courts.

†† cause: in law, a case to be decided by the court; lawsuit.

Othello は Iago の理性主義，実験室的証明主義によって自己に内在する本能に自信をもって愛を試験管に入れてみるように「みる」こと「証明する」ことを始める。

if I do *prove* her haggard,
Though that her jesses were my dear heart-strings,
I'd whistle her off and let her down the wind,
To prey at fortune.

しかし妻と会うや，愛の直観的洞察によって Desdemona の「美と美しい肉体」をみてその本質を把握し，自己の理性的証明の誤りを一瞬さとする。

Look! where she comes.
If she be false, O! then heaven mocks itself.
I'll not believe it. (277-279)

しかしこの直観的，精神的把握，瞬間的閃光も，Othello の正義と理性による実験室的証明の暗雲によってにわかにつつまれかきけされてしまう。Shakespeare は *Cymbeline* や *Winter's Tale* においても，愛の理性化という人の本能的欠陥をくり返し強調している。Iago は Othello のこの本能に一層の刺激を与える。

She that so young could give out such a seeming,
To seel her father's eyes up close as oak
He thought 'twas witchcraft. (209-11)

In Venice they do let heaven see the pranks
They dare not show their husbands. (196-203)

Othello は直観をすてて正義の理性的証明に逆戻りをする。再び裁判は開始される。

Villain, be sure thou *prove* my love a whore,
Be sure of it; give me the *ocular proof*; (360-361)

Make me to *see't*; or at the least so *prove* it,
That the *provation* bear no hinge nor loop
To hang a doubt on; (365-7)

正義と証拠調べは愛なき理性主義の双生児である。そして理性は目でみる証拠をにぎるほど，「満足」をしらずに一層狂暴に傾く。Othello は裁判官席よりとび出さんばかりに理性を失って「証拠」を求めて絶叫する。そして，その「証拠」の目的は「正義」か「不義」かの確かめである。裁判は *judgement* であり，*justice* を求めてやまない。

By the world,
I think my wife be *honest* and think she is not;

I think that thou art *just* and think thou art not.
I'll have some *proof*. ...

Would I were satisfied!

(384-391)

検事 Iago は Othello 裁判官の正義の要求に応じて、「状況証拠」(‘*strong circumstance / Which lead directly to the door of truth*’) (407-408) を提出しようと申し出る。しかし Othello は「直接証拠」(‘*living reason*’) を求める。

Iago. ; but yet, I say,
If imputation; and *strong circumstances*,
Which lead directly to the door of truth,
Will give you satisfaction, you may have it.

Oth. Give me a *living reason* she's disloyal. (406-410)

Iago は不承不承の風を装いつつ、「愚かな(自分の)正直と愛に刺激されて、こんなに深くこの訴訟に立ち入りしすぎた以上、お話しをしましょう」(sith I am enter'd in this *cause* so far, / Prick'd to't by foolish honesty and love, / I will go on) (412-4) といつて「直接証拠」を語る。「訴訟」(‘*cause*’) の姿はどこにもないはずであるのに、もうすでに法的な罪が存在するかの如くに Iago は語っており、Othello は自己の本質を分析する苦痛をさけて、Iago の正直さに自己をたくすという自己欺瞞におちいる。

Iago は Cassio の夢物語りを始める (414-427)。Iago が Cassio と同じ部屋にねむったときに、Cassio の歯ぎしりの音になやまされて、ねむれなかったときの Cassio の寝言が「証拠」であるという前置きに始まるこの物語りは、Iago の作り話であるにもかかわらず、Othello はそれを信じるのである。Cassio が “Sweet Desdemona,” “O! sweet creature!” と寝言をいいつつ、横にねている Iago の舌の根をぬくほどの接吻をし、Iago の太股に足をのせて「お前を、ムーア人に与えた運命は呪われよ」(‘*Cursed fate, that gave thee to the Moor!*’) とさげんだというこの夢物語りに Othello の裁判所は最初の動揺を示す：O monstrous! monstrous! (「あゝ、恐ろしや、恐ろしや」)。Iago が「夢」にすぎぬという否定も「過去の経験」(a foregone conclusion) のあらわれであるとして却下される。このことは「訴訟」は証明されていないにもかかわらず、今や Othello はもう姦通が既成事実であるかのように確信していることをあらわす。

Iago. ...
In sleep I heard him say, “Sweet Desdemona,
Let us be wary, let us hide ourselves!”
And then, sir, would he gripe and wring my hand,
Cry “O sweet creature!” and then kiss me hard,
As if he pluck'd up kisses by the roots
That grew upon my lips; then laid his leg
Over my thigh and sigh'd, and kiss'd and then
Cried “Cursed fate that gave thee to the Moor!”

Oth. O monstrous! monstrous!

Iago. Nay, this was but his dream.

Oth. But this denoted a *foregone conclusion*.†

'Tis a shrewd doubt, though it be but a dream.

Iago は自分の思いもよらぬ、全く計算外の効果を Othello にみてとるや、「他にもあるたくさんの証拠」('other proofs') をこの夢物語りは確かなものとするといつて、ますます Othello の「無知な嫉妬」('unbookisk jealousy') (4. 1. 102) をあうり、ついに Othello は「彼女を八つ裂きにしてくれん」(I'll tear her all to pieces) (432) と叫ぶに至る。

Iago は「危険な思想はその本質において毒であり、その毒が少しでも血に働きかけると硫黄の鉱山のようにもえあがる」(Dangerous conceits are in their natures poisons, / Which ... / But a little act upon the blood, / Burn like the mines of sulphur.) (3. 3. 327-330) といつて Othello の性格の激変を予告したが、今やその予言が実現されたのをみた。Othello はまだ確立されていない訴訟をもうすでに確立されているように、存在していない罪をすでに存在しているかのように、証明されていない罪をすでに証明されているかのように、事件を扱っていることが Othello の性格の急変のあらわれである。これをみてとるや Iago はこの夢物語りは「多くある他の証拠」('other proofs') (431) の真実性を強めるのに役立つかもしれぬといつて、「強い証拠にはならぬ他の多くの証拠」(other proofs / That do demonstrate thinly) をあげる。「強い証拠にならぬ」という言葉が強い証拠になることを示唆するように Othello に逆効果を狙いまた「他の多くの証拠」といって証拠の無限性をほのめかして、証拠求めに狂う Othello の恐怖を無限に深めている。しかし Iago の「多くある他の証拠」とは実際には何も存在していない上に Iago が語った証拠はたった一つの証拠にすぎない。それはハンカチの物語りである。

And this (Cassio's dream) may help to thicken *other proofs*
That do demonstrate *thinly*. (431-432)

Handkerchief の物語りも存在しないはずの「他の多くの証拠」とともに彼女の罪を証明するといつて、「他の多くの証拠」の無限の存在をほのめかす。

If it be that or any that was hers,
It speaks against her, *with other proofs*. (441-442)

Othello の弱点は「見える証拠」である。Iago は、Othello が最初に妻に贈ったハンカチを Cassio がもっているのを「みた」といって「みた」ことにアクセントをおいて強調する。

I know not that; but such a handkerchief—
I am sure it was your wife's—*did* I to-day
See Cassio wipe his beard with. (438-440)

† *foregone conclusion*: although what he said and did was in a dream, it nevertheless pointed definitely to something that he had actually experienced before. (Kittredge)

渴望の証拠を入手するや Othello 裁判所の正義の判決は下される。Cassio に対しては死刑、Desdemona に対しては血の復讐の判決が下される。

(Cassio に対する判決)

O! that the slave had forty thousand lives.
One is too poor, too weak for my *revenge*.

(Desdemona に対する判決)

All my *fond love* thus do I blow to heaven:
'Tis gone.
Arise, *black vengeance*, from the hollow hell!
Yield up, O love! thy crown and hearted throne
To *tyrannous hate*. Swell, bosom, with thy fraught,
For 'tis of aspics' tongues! (446-451)

O *blood, blood, blood!* (452)

Even so my *bloody thoughts*, with *violent pace*,
Shall ne'er look back, ne'er ebb to *humble love*,
Till that a *capable and wide revenge*
Swallow them up. (458-461)

Damn her, lewd minx! O, *damn* her!
(Come, go with me apart); I will withdraw
To furnish me with some *swift means of death*
For *the fair devil*. (476-479)

先の Duke や Venice の元老院の人々の裁判と比較すれば、いかに Othello の裁きが愛と公平を欠いているかがわかるであろう。正義を口ぐせのように主張する Othello の裁きが *Winter's Tale* の Leontes の正義の如くに「(正義は)暴力となる」((lest) your justice prone violence) (2. 1. 126-7) 破目になった。彼の正義は「黒い復讐」('black vengeance') (448) となり、彼の「血なまぐさい思考」('bloody thoughts') (458) は「暴力の歩みをもって」('with violent pace') (457)「強力にして広大な復讐の大海」('a capable and wide revenge') の飽くことのない嗜欲をみたすまで「けんきょな愛」('humble love') の岸边には退潮することはない。

正義が復讐と暴力にすぎない今、正義の裁判官の良心は、「復讐的正義」('retributive righteousness')⁴ をいかにして「宗教的正義」に高めてゆくかに苦心する。「暴力の正義化」('justify violence')⁵「暴力を超越したい欲望」('desire to transcend violence')⁶ とすぐれた批評家 Heilman の呼んでいる昇華作用がそれぞれである。「儀式的ひざまずき」('ritualistic kneeling') により又「大理石のように不透明な空にかけて」('by yond marble heaven') 暴力と復讐が宗教的に正当化されてゆく。

death') (3. 4. 478) を考案しつつあるからである。

しかし Iago は Othello の中に精神的把握による Desdemona の本質の正しい洞察のある裁判官は弁護士に対し深い嫉妬をもっているのみか「迅速なる死に方」('swift means of ことを警戒する。理性主義者 Iago の最大の敵は愛に対する直観的洞察である。言葉においてハンカチの証拠を Othello の耳に入れても、まだ Othello の目には入れていない今、Othello の心を「石に変える」(4. 1. 191) ことはできない。「目でみる証拠」は Iago のそれではなくて Othello の目のそれではなくてはならない。なぜなら Othello には正義や理性とかかわりのない愛の直観が存在するからである。この直観的信仰を物質的理性が破壊しなくてはならぬ。

Iago は再び暗示的、催眠術的卑わいな話しをすることから始める。「許されざる接吻」('an unauthoriz'd kiss') (4. 1. 3)「一時間裸で床の中にも、何もしない」(to be naked with her friend a-bea / An hour or more, not meaning any harm) (3-4) つくり話しに Othello の想像力は理性の限界をこえて刺激される。そこに「目にみえる証拠」のハンカチの話しをもち出されるや、不吉な予感におそわれる。

O! it comes o'er my memory.

As doth the raven o'er the infected house,

Boding to all,—he had my handkerchief. (20-22)

更に「目にみえない貞潔」('her honour is an essence that's not seen') (16) を Iago にもち出されるや、Shakespeare の主人公の中で最も非哲学的な Othello にとってそれは最も精神的苦痛と錯乱をおこす異質の世界となる。Cassio が Desdemona との邪恋を自慢して話したことを Iago にきかされるや、"what? what? ... Handkerchief—confessions—handkerchief" と言語錯乱をおこして失神する。これは裁判官が完全に理性を失なったことを象徴する。Iago は「多くの立派な、貞しゅくな女性達が全く罪もないのに非難に会う」('many worthy and chaste dames even thus, / All guiltless, meet reproach.') (4. 1. 47-8) という。

意識をとり戻した Othello に Iago は Cassio と話しをすることになっていることを語り、二人の会話をきくために、身をかかしているようにいう。そのとき Iago は Othello に Desdemona との不倫な関係の「話しをもう一度 Cassio にさせる」('I will make him tell the tale anew') (85) ことを約束する。

Cassio がやってくると、Iago は Cassio の恋人であり夜の女である Bianca のことを話しさせる。「副官」と Cassio を呼び、Cassio に過去の苦い経験と副官の地位回復のことを想起させる。Cassio にそれから大声で 'Ply Desdemona well, and you are sure on't' (4. 1. 107-8) といって Othello のぬすみ聞きに耳にきこえるようにする。Othello はそれが副官回復のために Cassio が Desdemona に訴訟を懇願することをさしているとしらず、性の遊びに Desdemona を 'ply'† している(「しつこくせがむ」「せかす」と悪く解する。そして Othello にはきこえないように小さい声で Cassio に Now, if this suit lay in Bianca's power, / How

† ply: to urge, to importune, to press hard (Schmidt), to use or wield vigorously (a tool, etc.) ME. (O.E.D.) この外に自動詞としてであるが航海に使われる言葉として 1. intr. To beat up against the wind; to tack, work to windward 1556 b. to direct one's course, steer. この劇は海の用語が多いので ply も下品な意味で船(女)をあやつるという意があるかもしれない。しかしどの注解書にもかいていないのは ply が他動詞としてつかわれているからであろう。

quickly should you speed! (108-109) (「もしこの訴訟が Bianca の思うままになるならば、何と早くあなたは成功するであろう」) と Iago はいう。Cassio はてれくさそうに笑うと Othello は Desdemona のことを笑っていると解し、怒る。‘Look! how he laughs already!’.

Iago が Bianca のことを三人称を使って「彼女は君が彼女と結婚するこもりだと発表している」というと、Cassio は「はっ、はっ、はっ」と大笑いする。Othello は高慢にかち誇るローマ人に Cassio をたとえて、狂気になる。“Do you triumph, Roman? do you triumph?” Othello は Cassio の「顔のどの片隅にでも宿るあざけりやけいべつに注意してみる」(mark the fleers, the gibes, and notable scorns, / That dwell in every region of his face’) (83-84) ことによって彼の「無知な嫉妬」(‘unbookish jealousy’) が Cassio の笑い顔、身振り、軽卒な身のこなしを全く誤解する」(102-104) (‘construe / Poor Cassio’s smiles, gestures, and light behaviour / Quite in the wrong’)。この理性の証拠さがしは実際に Bianca が Iago の予期しない形で運命のハンカチを持参して Cassio の前にあらわれるのを Othello がみることによって、決定的な材料をつかむことになる。Bianca は Cassio が偶然にも自分の部屋に投げこまれてあるのをみつけたというこのハンカチの刺しゅうを Cassio に写すように依頼されたのであるが、Bianca はこのハンカチは Cassio のかくし女のものではないかと嫉妬をおこしたのである。

Bian. ...
... This is some
minx’s token, and I must take out the work!
There, give it your hobby-horse; wheresoever
you had it I’ll take out no work on’t.
Cas. How now, my sweet Bianca! how now;
how now!
Oth. By heaven, that should be my handkerchief!
(4. 1. 156-163)

Othello は Bianca が嫉妬に狂って Cassio に投げつけたハンカチが自分のハンカチだとわかるや、「おゝ、あれがおれのハンカチとは」(‘By heaven, that should be my handkerchief!’) (162) と叫んで、Cassio が去るやただちに Iago の前に姿をあらわし、第一に口をきいた言葉は Cassio 殺害の方である。次に Desdemona を 9 年間殺しつづけたいと判決を与える。

Oth. [Advancing.] How shall I murder him,
Iago?
Iago. Did you perceive how he laughed at
his vice?
Oth. O! Iago!
Iago. And did you see the handkerchief?
Oth. Was that mine?
Iago. Yours, by this hand; and to see how he

prizes the foolish woman your wife! she gave it
him, and he hath given it his whore.

Oth. I would hane him nine years a-killing.
A fine woman! a fair woman! a sweet woman!

(177-187)

Iago は「目にみえる証拠」(‘ocular proof’) の実際を Othello 自身の目でみさせることに成功したことをいかに喜んでいるかは「彼の笑い顔をみましたか」(‘Did you perceive’)「あのハンカチをみましたか」(‘Did you see the handkerchief?’)「どんなにあなたの奥さんを彼が馬鹿にしているかがわかれば」(‘to see how he prizes the foolish woman your wife!’) とたたみかけて「みた」ことを強調しているのをみればわかる。

しかしここでも Iago の証明主義が勝を占めたとはいえない。なぜなら Othello は死の判決を兩人に下しておきながらも、Desdemona を「美しい女、色白の美人、やさしい女」(‘a fine woman! a fair woman! a sweet woman!’) といって想像力による彼女の本質を把握し始めるからである。理性と直観、論理と信仰、正義と愛の二つが Othello の心を舞台として大葛藤を演じているからである。Iago がそれを否定すると、「彼女の本質をいっただけだ」(‘I do but say what she is.’) (196) といって彼女の罪と彼女の本質を別個に考えていることをあらわす。Othello の愛が如何に根深いかは次の文をみればわかる。

O! the world hath not a sweeter
creature; she might lie by an emperor’s side and
command him tasks.

I do but say what she is.
So delicate with her needle! An admirable
musician! O, she will sing the savageness out
of a bear. Of so high and plenteous wit and
invention.

And.

then, of so gentle a condition!
I’ll not expostulate with her, lest her body and
beauty unprovide my mind again. (192-217)

しかし Othello が「彼女の本質を把握したときは、彼自身を滅亡に導くかぎである」(‘His own phrase “I do but say what she is” is the key to his destruction’)⁸ Othello は誘惑シーンの最初に Iago によって猜疑心をもやされたとき、彼女の美しい姿をみて直観的に彼女の本質を把握して「もし彼女がいつわりなら、おゝ、そのときは天が自らに唾を吐きかけているのだ」(‘If she be false, O! then heaven mocks itself.’) といって彼女の不実を否定したが、そのあとやはり証明主義の理性の雲におおわれて迷路に入った。今の Othello の愛による直観的洞察も Iago による決定的目撃の証拠を想起することによってそのわずかな啓蒙の光りをかきけされる。彼女の美しい魂を美しい肉体を通して瞬間的閃光的に洞察する度毎

に、Othello の理性と正義は彼女に死の判決を与える決心を一層強くしている。

So delicate with her needle という讚美のあとに

O! a thousand, a thousand times (worse). (202)

And of so gentle a condition のあとに

{ I will chop her into messes. Cuckold me! (211)

{ Get me some poison, Iago; this night. (215)

しかも更に悪いことには Othello は自ら Desdemona に会うことをさけようとしている。すなわち、「彼女の美しい肉体が私の決意を再びにぶくするといけなから、彼女をいさめたくない」(‘I’ll not expostulate with her, lest her body and / beauty unprovident my mind again’) (4. 1. 216-217) といつて毒殺を考えつく。彼女を直観的に把握することをさけようとしているのである。それは Othello が自己の正義の非を教える愛の精神的洞察の与える苦痛を自らに課したくない自己欺瞞であることに外ならない。Conrad の「自己知識のくらい陰から逃避しようとする」試みである。自分の実体に直面することは苦痛の最大であるからである。しかし Iago はわざとそれに直面させようとする。毒殺でなく「彼に向かって目をあげた彼女の最もやさしい無垢の顔」(the sweetest innocent / That e’er did lift up eye) (5. 2. 197-8) を見下るしながら絞殺する方法をすすめる。Othello は彼女の美しい魂を象徴する彼女の「天使の」「目」をみすえながら、罪を犯した彼女の「美しい肉体」を抹消して「あの魅力と彼女の目」(‘those charms, thine eyes’) (5. 1. 35) を消して(‘blot’) (5. 1. 35) しまうのである。今までの愛と正義、信仰と論理、精神と肉体の葛藤を一瞬間に演じさせて、Othello 自らの愛の光りの目を Othello 自身の手で「自分の胸から」(‘Forth of my heart’) (5. 1. 35) 正義という裁きの暴力で消し去る苦痛を自らに与えることが Iago の sadism を満足させるからである。もう一つの狙いは自己愛による自己中心性の理性にとって最大の敵である信仰と他者愛の Desdemona の惨死が彼に快楽を供するためである。日々の彼女の美が「彼をみにくくする」(4. 3. 19-20) ことが Iago の残酷の理由である。

Iago が Othello に死刑の手段として毒殺でなく、絞殺をとることをすすめたとき、Othello は「正義に適う」(‘the justice of it pleases’;) (4. 2. 221) といつて喜ぶ。

Iago. Do it not with poison, strangle her in
her bed, even the bed she hath contaminated.

Oth. Good, good; the justice of it pleases;
very good. (219-221)

‘the justice of it’ は Heilman によれば ‘legal justice’ 「法的正義」⁹ といっているが、その他に同時に正義の神と剣 ‘Justice’ と ‘her sword’ (5. 2. 17) をさしていることを忘れてはならない。法的正義と神学的正義を狙ったのである。なぜなら Othello の自己欺瞞にとって彼女の死は「殺害」(‘A murder’) でなく「いけにえ」(「生贄」) (‘a sacrifice’) である (5. 2. 64-65) からである。それは「邪淫で汚れた」(‘lust stain’d’) 床がその罪のゆえに「邪淫の血」(‘lust’s blood’) を流されて汚されることによって、神々の怒りをしづめるからである。

Thy bed lust-stain'd shall with lust's blood be spotted.

(5. 1. 36)

かくして Othello 裁判所は自分の主観のみで世を形作っている Iago 検事 (4. 1. 74-5) の理性と証拠を採用し、一人の弁護士の手を要せずして、正義の裁きを下す。しかも刑を執行して Desdemona を殺したあとで、彼女の潔白を Emilia によって主張されたときも、裁判官 Othello の正義の裁きは正義を主張して自己の正義を弁護する。I did proceed upon *just ground*. (5. 2. 136) しかしその一方 Desdemona は彼の非理性的裁きに対して正義と理性をもって裁き返さいのは注目に値する。この劇の人物の殆んどが Iago, Othello, Brabantio が自分の方に正義があると主張するのみならず、自分こそ被害者の立場であると確信して、正義と理性によって他を裁いているに反し、Desdemona のみは正義を主張しないのみか、正義と理性をもって裁き返さないでいる。一度のみ Othello の「不親切」を「法的な非難」(‘arraign’, ‘suborn’, ‘indict’) をもって報いるがそれさえも、あとで彼女は後悔する。

I was—unhandsome warrior as I am—
Arraigning his unkindness with my soul ;
But now I find I had *suborn'd* the witness
And he's *indicted* falsely.† (3. 4. 150-153)

私は——何と私はみにくい (不公平な、けちな) 戦士であることか——彼のつれない態度を私の心で正義の法廷に召喚していたわ。

しかし、今や私は証人を誘って偽証させようとしたことがわかった。そして彼は罪もないのに法的な裁きをうけていたのだわ。
(私訳)

彼女の中傷者がいることを下女の Emilia が示唆したときも、Desdemona は神の愛をもって報ゆる: ‘heaven pardon him?’ (4. 2. 136)。これに反し Emilia は正義の裁きをもって報いる: ‘A halter pardon him.’ (137) (「首つりのつなを彼をゆるさんことを)」Othello の非正義の裁きが彼女に死刑を決定したときでも、彼女は「彼の不親切が彼女の生命を奪っても愛を汚すことはない」(‘And his unkindness may defeat my life, / But never taint my love.’) (4. 2. 160-161) という。Emilia が、夫の浮気に対しては「復讐」という正義をもって報いるというに対して Desdemona は正義の裁きでなくて恩恵の愛によって対する (4. 3. 107-108)。Cassio の訴訟のためにする彼女の弁護は夫からの虐待の中でなされるが、「自分のためにするよりももっと多く他人のためにする」(‘What I can do I will, and more I will / Than for myself I dare’) (3. 4. 129-130) 愛より出でている。Othello と Cassio の二人の「和解」

† unhandsome=unfair, illiberal 「美しい兵士」‘fair wavior’ が彼女の別名であったので美しくないという意の外に不公平な、けちなという意を含めたのである。

arraign, suborn, indict すべて legal term であることは注意を要する。

arraign=summon before a court of justice

suborn=to induce secretly to do an improper or unlawful thing and esp, commit perjury.

indict=to make a formal accusation against on the basis of legal evidence.

(‘atone for them’) (4. 1. 245) をなさんとする Desdemona の姿は、この世を救わんとして生命をおとす神の子をおもわせる。Shakespeare は Desdemona のみをこの劇で裁判性の網の目よりもらしている。Shakespeare は真の正義とは「贖罪」(‘atonement’) であるといっているようである。実さいに彼女の犠牲的死によって Othello と Cassio の愛は回復するのである。

この「美しい勇士」(‘fair warrior’) (2. 1. 185), 恩恵の人 Desdemona を「みにくい盗賊」(‘foul thief’), 自己愛の裁き手 Othello が殺しのシーンの第五幕で再び「正義の御使」(‘minister of justice’) として裁くのであるが、今までにわかったように、第五幕は「最後のひとねり」(‘an additional turn of the screw’)¹⁰ であって Desdemona に対する Othello の罪に総決算的に焦点を合わせて光りをあてただけにすぎないのである。第五幕のみにおいて Othello が裁判官をもって任じたという批評の誤りは今までの分析によってわかるであろう。では次にこの第五幕の正義の裁きを分析してみたい。

[53. 5. 28 (Sun.) 脱稿. 札幌, 西岡の初夏. 原用 47 枚]

あ と が き

この論文はアメリカの最大の学者 Heilman と Winifred Nowotny の論文に負う所大である。両学者の分析にまさる論文を私はしらないことを断言してはばからない。深い哲学, 信仰と宗教的素養, 何よりも鋭い洞察そしてこれらを表現する明晰な論理と高い格調の文体——日本の学界にもかかる深い学者のであることを希望してやまない。Nowotny は love と justice の対立とみているに反し, Heilman は love と the whole world of rational demonstration の対立とみる両者の差はあるが, Nowotny の justice も Heilman の rational mind もともに to reason love にその誤りをみているので大差はない。Heilman は Nowotny を激賞していて excellent とか one of the best I know とかといっている。Heilman も彼女の論文から影響をうけているようである。

References

1. Winifred M. T. Nowotny, “Justice and Love in Othello” in *University of Toronto Quarterly*, Vol. XXI, 1952, p. 330.
2. *Ibid.*, p. 332.
3. *Ibid.*, p. 330.
4. Robert B. Heilman, *Magic in the Web*, Lexington, 1957, p. 37.
5. *Ibid.*, p. 135.
6. *Ibid.*, p. 135.
7. *Ibid.*, p. 132.
8. *Ibid.*, p. 133.
9. *Ibid.*, p. 134.
10. W. M. T. Nowotny, *op. cit.*, p. 330.